

『認められたい』の正体
承認不安の時代

日々の臨床で中高生の若者と接していると、友達関係の中に入れて孤立している子どもは少なくないが、その一方で気になるのは、一見すると友達関係を楽しんでいるように、いざ話を聞いていくと、仲間に嫌われないよう神経を遣うことに汲々としている子どもたちの存在である。明らかに適応不全に陥る子どもがいる半面、適応に過剰なほどに神経を遣っている子どもたちも決して少なくないのだ。評者は勤務先の大学で多くの学生に出会うが、彼らの纏める論文のテーマにも対人関係に関するものが少なくない。明らかに自分の問題が発端で生まれたと思われるものによく出会う。その問題意識の背後には、交友関係で深く付き合うことは怖い、孤立するのも怖い、といったジレンマに陥っている学生が多いことに驚かされる。

今日、なぜこのような悩みを抱える若者が多いのか、そんな問題に真正面から取り組み、その背景に潜んでいる問題に迫ろうとしているのが本書である。著者はもととて大学で心理学を専攻してはいたが、評論の立場から今日の臨床の問題に関心を注ぎつつ、哲学に対する造詣を深め、現象学的立場から今日のこの問題の本質に迫ろうとした野心作である。

本書の鍵概念は「承認欲望」、つまりは他者に認められたいという欲望である。なぜ、著者がこの鍵概念を用いて、今日のこの問題の本質に迫ろうとしたのか。それを理解するためには、近代以前とそれ以降とは、人間と社会の関係のありようが大きく変わったことに目を向ける必要があるという。近代以前は、神や王といった存在を前に、共同体のルールや価値観は絶対的なものと

して受け入れられてきた。そのような時代にあつては、「自分とは何か」といった個人の哲学的な疑問の入る余地はなかった。しかし、近代に入ると、神への信仰は薄らぎ、王の權威も失墜する中で、市民革命が起り、市民は自由というものを初めて知ることになった。市民は自由を獲得したことによって多くの縛りから解放され、自由を謳歌するようになった半面、自らの価値観を見出したり、自己実現を果たしたりするためはどうしたらよいか悩むようになった。明確な参照枠を失ったことで、それをみずからの力で生み出さねばならなくなったからである。現代社会では、何事につけて個人の自由と権利が叫ばれて久しいが、それとともに自由に伴う不安がいよいよ深刻味を帯びつつある。若者の間で「自分さがし」や「自己実現」という言葉が氾濫しているが、それは「承認不安」と深く関係しているというのである。

「認められたい」欲望は、人間のあらゆる行為の基底にある欲望で、人間が人間であるがゆえの欲望である。しかし、やっかいなことに、自

分を認めてもらうためには他者を必要とする。一人ではどうにもならないゆえに、そこに必然的に様々なジレンマや葛藤が生まれることになる。人間が生まれてから出会う他者は、成長過程で様変わりするが、その中で最も重要な他者は、乳幼児期の母親を初めとした家族、学童期になると親しい友人、青年期に入れば恋人などである。彼らこそ「ありのままの自分」を認めてくれる存在であるはずだからである。それが「親和的他者」で、それを取り囲むようにして、学校、職場の仲間や同僚などの「集団的他者」、さらには社会における不特定多数の「一般的他者」へと広がりをもつようになる。人間は成長過程で、この三つの各々の「他者」から「認めてもらいたい」という欲望が強まっていく。自分というものの存在価値を高めた、自己実現を遂行したりしてゆく



「認められたい」の正体
承認不安の時代
山竹伸二
講談社現代新書、2011年
794円（税込）

ためには、他者からの承認が必要となってくるからである。それゆえ、「承認不安」が起こってくることになる。

乳児を見ているととりわけ実感することであるが、人間は本来他者との関係をもつことに喜びを感じるものである。この「関係的快」への欲望は、自分の存在価値への承認を求める欲望の重要な発生契機となる。

「関係的快」は原初的な親和的充足感を生み出す。このようにして乳児は母親との間で「関係的快」を体験するが、幼児期の後半になると、母親は子どもの一方的な自己主張に対して、「そんなことをしたらお父さんに言いつけますよ」「他人に笑われますよ」「となりの〇〇ちゃんはそのんことしないよ」などと言いがらしつけるようになる。このようにして子ども自身が暗々裏に第三者を介した一般的なルールや価値観を学ぶ道が切り開かれてゆく。「集団的他者」による承認が必要になってくるわけである。

両親から物理的にも心理的にも距離が生まれ、学童期以後の集団生活に入るが、ここで集団的他者からの

承認をめぐって強い葛藤を経験することになる。今日の若者が集団に認めてもらうために神経を遣うことに汲々となっていている事態を、著者は「空虚な承認ゲーム」と呼び、その背景と問題解決の道を探ろうとする。本来の「他者からの承認」がどのようにすれば可能になるか、その問題提起の書ともいえるものである。

著者は、社会学、哲学、臨床心理学、精神病理学など、多岐にわたる領域に踏み込みながら、今日の臨床現場の問題を捉えようとしている。さらに、大きな時代の潮流を読み取る中で、人間と社会の関係がどのように変わりつつあるのかという視点に立って、今日の人間のところに潜在する不安の本質に迫ろうとしている。

「他者による承認」は相手が必要とするゆえ「関係」という視点が不可欠であるが、「親和的他者による承認」が「甘え」体験そのものであることも考えると、著者の主張に評者は共鳴するところが多い。日々の臨床や支援に忙殺され、ややもすれば目の前の子どもたちへの対応に

汲々としがちな臨床現場の人たちにとって、著者の指摘は、臨床実践に對して時代背景を踏まえて対象化することの必要性に気づかせてくれるのではなからうか。

小林隆児

(こばやし・りゅうじ)大正大学人間学部